

# はしがき

本ディスカッション・ペーパーは、京都大学東南アジア地域研究研究所(旧・京都大学地域研究統合情報センター)の共同利用・共同ユニット「音楽文化の伝播の解明を目的とした中国地方・九州地方における日本民謡の計量的分析」(2016年4月-2017年3月)の成果報告である。

本研究ユニットは、2回の研究会を実施した。第1回研究会は日本民謡の地域性に対して計量的な観点から分析することの意義の確認に加え、分析する際の指針と問題点を取り上げ、ディスカッションを行った。第2回研究会では、近年盛んに行われている文化資源の集約・共有化のうち、音楽研究に特化した事例を取り上げ、今後の分析の方向性をまとめた(詳細については本ペーパーの「活動記録」の項目を参照)。

研究ユニットのメンバーは以下の通りである。

- 宇津木 嵩行(中央大学)
- 岡本 佳子(東京大学)
- 河瀬 彰宏(同志社大学)
- 工藤 彰(東京大学大学院)
- 福田 宏(愛知教育大学)
- 矢向 正人(九州大学)
- 柳澤 雅之(京都大学)
- 吉野 巖(北海道教育大学)

本研究ユニットの主たる目的は、日本の伝統音楽を対象にその地域的特徴——各地域の音楽を構成する要素とそれらの相互的關係——を定量化し、日本本土の民謡の特徴と比較することにより、「地域の知」の創生と再生を実践することである。日本民謡を電子データ化することで情報学的分析基盤(音楽コーパス)を構築し、これに計量的分析を実施することで、旋律的特徴(音組織)を抽出した。音組織とは、旋律に内在する法則であり、ある文化の音組織を捉えることは、その文化の音楽を形成する音の相互關係、伝播・変容、普遍性の解明につながると考えられている。九州地方(西海道)、中国地方(山陰道・山陽道)における伝統音楽の特徴を統計学と情報学の方法論を適用しながら実証的に抽出した。

以上の問題に対して、本研究ユニットでは、工学・情報学・統計学・政治学・農学・文学・音楽学・心理学の各分野の研究者が一同に介し、研究会を実施した。各研究者の専門は異なるものの、音楽文化の実態解明に向けた具体的な指針を提示できたことは、今後の音楽文化の地域情報学的研究の方向性を決定づける貴重な一歩となった。

本ペーパーの構成は次の通りである。はじめに研究ユニットの趣旨について説明し、分析対象である日本民謡および電子データ化の対象となった『日本民謡大観』の特徴をまとめる。次に、日本音楽を分析する際に利用した基礎理論について、日本伝統音楽に関する古典から抜粋するかたちで紹介する。そして、情報学と統計学の分析を通して得られた日本民謡の地域性に関するデータを九州地方、中国地方の順に示す。最後に、本ディスカッション・ペーパーの内容を総括する。

本研究ユニットの活動を進めていくにあたり、多くの方々のご協力をいただくことができた。ここに感謝を申し上げる次第である。

研究ユニット代表  
河瀬 彰宏